

## 蔵書印「子孫永保／雲煙家蔵書記」について——その来歴と蔵書印主

大野 順子

表題にあげた「子孫永保／雲煙家蔵書記」の蔵書印主の確定を試みた。

【資料 1】にあげた画像が今回の問題となっている印である。これは国文学研究資料館所蔵の『愚昧記』から取りだしたものであるが、この印には「蔵書印 I D 00200」と 5 桁の数字が付されている。「蔵書印データベース」では同一印類に対して同じ I D を付与するというルールになっているため、1 レコードずつばらばらの資料から撮ってきた蔵書印に対して後から蔵書印 I D を振るという作業をする。そこで、「子孫永保／雲煙家蔵書記」という印文で検索をかけると、【資料 2】にあげたように【資料 1】以外に 9 つのレコードが出る。典拠を見ていくと、「子孫永保／雲煙家蔵書記」の蔵書印主として、『近代蔵書印譜』第二編と国文学研究資料館『調査研究報告』第 4 号は鹿島清兵衛、『新編蔵書印譜』と『ハーバード燕京図書館の日本古典籍』は安西雲煙を指摘する。また、『調査研究報告』第 4 号の後半部分には「既刊蔵書印影索引稿 [人名編]」があるのだが、こちらでは鹿島清兵衛と安西雲煙に同じ印文を付与しており、すでにこの時点で「子孫永保／雲煙家蔵書記」の印主には二説あるという認識を示しているといえよう。

【資料 1】・【資料 2】以外では、この印はどう扱われているのか。試みに電子データを中心に見ていくと、【資料 4】のように印主を安西雲煙とするものと、【資料 5】のように鹿島清兵衛の名をあげるものに分かれた。

この二人の印主の間には、錯誤が起こるような関係があるのか、【資料 6】でそれぞれの略歴をたどって見たところ、鹿島清兵衛は安西雲煙没後の生まれであり、伝記的に直接何らかの繋がりを見いだすことはできなかった。

ところで、【資料 7】にあげた西尾市岩瀬文庫所蔵本 11 点におされている当該蔵書印について、西尾市岩瀬文庫データベースは「安西雲煙、のち鹿島清兵衛」としている。

西尾市岩瀬文庫には【資料 8】の『雲煙家印譜』という原鈐印譜が残されている。こちらは同文庫のデータベースの解説に拠れば鹿島清兵衛所用印ということで、この中には 67 種類の蔵書印が残されている。内容欄に掲載されている同書の中には、鹿島清兵衛の号そのままの印文を持つものがみられることより、同書が鹿島清兵衛の印を含むことは確かといえよう。しかしながら、67 種類と数が多いことや波線で示したように「米老女」という印文のものもあり、『雲煙家印譜』は鹿島清兵衛個人のものというよりは鹿島家の蔵書印を集めた本というのがふさわしい。このなかには下線（下線はすべて論者による。）で示したとおり「雲煙」という言葉を含む印が幾つも見られるにもかかわらず、肝心の「子孫永保／雲煙家蔵書記」という印が見られない。したがって、この印は鹿島清兵衛の印を含む鹿島家の蔵書印を収集した時点では、鹿島家の印として認められていなかったということが推測される。【資料 8】の備考の欄には、ゴシックで示したように「印文のうち「深洲／和久楽」は深川和倉町（現・江東区深川 2 丁目・冬木）のことで、鹿島家の別荘があり、安西雲煙旧蔵の雲煙家文庫もそこにあった。」との記述があり、安雲煙西の旧蔵書を、鹿島清兵衛かどうかはわからないものの、鹿島家で購入したというのが当該蔵書印の来歴としては穏当であろうと思われる。ただし、岩瀬文庫学芸員によれば、安西の旧蔵書が鹿島の別荘にあるとしたのは長谷川伸の『素材素話』所収「ぼん太夫人」に拠るとのこと、史料的な確実性はいささか低いと言わざるを得ない。したがって、安雲煙西の旧蔵書を鹿島家で購入した、と断定するには更なる調査が必要となる。

今回の問題は蔵書印データベースが作成されたことで初めて問題として浮かび上がってきた事項である。それぞれの資料に矛盾があるとしても、こうして収集統合される機会に恵まれなければ、そのまま見過ごされ、もともとは一つの蔵書群であるにもかかわらず、あるいは安西と鹿島の蔵書として

二つに分かれて認識され、蔵書群の特長の正しい把握が阻害された可能性は高い。

今回は「子孫永保／雲煙家蔵書記」のみを取り上げたが、他にも印譜によって蔵書印主に揺れの見られる例は散見される。よって、それぞれの印譜ごとに断片としてのみ見られ、利用されがちであった蔵書印のデータが当館の蔵書印データベースによって統合されることの重要性は、今後ますます高まってこよう。



【資料1】

『愚昧記』 転法輪三条実房、仁安二年・寿永元年・消息ほか存年写（国文研，W  
サ5 - 9 - 1 ~ 4） / 7.1 × 5.0 / 蔵書印 I D 00200

【資料2】

『古語拾遺』 元禄9 跋刊（『近代蔵書印譜』二編）●鹿島清兵衛

『国史大辞典』第8巻「蔵書印」（『新編蔵書印譜』）●安西雲煙

『歡喜抄』 心塔記、正和3 写（ハーバード燕京図書館 TJ1873.4/3400 『ハーバード燕京図書館の日本古典籍』）●安西雲煙

『勅撰名所和歌抄出』 宗碩編、元禄8 刊（国文研，W タ2 - 190 - 1 ~ 2）

『近代御会和歌』 写（国文研，W 国文研，W ナ2 - 421 - 1 ~ 18）

『伊勢参宮名所図絵』 享和元刊（大英図書館蔵 1614d14、『調査研究報告』第4号）●鹿島清兵衛

『諸將旗旌図』 寛永14 刊（大英図書館蔵 Or.75e9、『調査研究報告』第4号）

『蒲東崔張珠玉詩集二卷』 正徳三刊（東京大学東洋文化研究所 雙紅堂-小説-140）

『惺窩倭歌集』 藤原肃（惺窩）（京都大学附属図書館・谷村文庫 4-23/セ/1）

【資料3】

「既刊蔵書印索引稿 [人名編]」（『調査研究報告』第4号）

安西雲煙 \* 子孫永保雲煙家蔵書記 『蔵書印集成』二（平野喜久代 昭和49・5 私家版）P68

鹿島清兵衛 \* 子孫永保雲煙家蔵書記 『好書雜載』（高木文 昭和7・10 私家版）P87

【資料4】

早稲田大学図書館 ... 『塵塚誹諧集』二冊（斎藤 徳元, 1559-1647）『唐詩帰. 目録, 卷1-36』六冊（鍾 惺, 1574-1624）ほか数点に捺された「子孫永保雲煙家蔵書記」を安西雲煙のものと認定。

富山市立図書館 ... 山田孝雄文庫の『源氏男女装束抄』（3冊）に押された印を安西雲煙のものと認定。

「俗に『蔵書は一代』とも言われ、書物は数奇な運命に翻弄されるものようであるが、愛書家としては、未永く家に蔵し、子孫に伝えたいと思うものである。安西雲煙の蔵書印は、この心理をそのまま表した印文「子孫永保雲煙家蔵書記」である。縦7cm横5cm淡青色の陰影で、上欄には左から横書きで「子孫永保」中央には「雲煙家／蔵書記」と縦二行書きにし、右の袖には何巻揃いかを記入する欄が設けてある。

山田孝雄文庫では、『源氏男女装束抄』（3冊）に、この蔵書印がある。押捺してあるのは、各冊とも前表紙の見返しであり、本文に印を押してないのは、書物を蔵書印で汚したくなかったからであろう。

安西雲煙は近世後期の書画商にして鑑定家である。屋号は和泉屋帛吉、雲煙道人は号である。4歳のとき安西氏の養子となり、12歳にして書肆玉巖堂和泉屋金右衛門方へ奉公、天保2年『近世名

家書画談』を刊行する。晩年には画論『鑑禅画適』を著した。(『日本古典籍書誌学事典』による)  
(富山市立図書館「図書館だより」第十五号(平成十六年十月))

#### 【資料5】

大阪府立中之島図書館 … 『怪談全書』(元禄十一年版)に捺された「子孫永保 / 雲煙家蔵書記 / 共五巻」は鹿島清兵衛のものとする。

西尾市立図書館 … 岩瀬文庫の『寛知集』(写本二十五冊)に捺された「子孫永保 雲煙家蔵書記」を鹿島清兵衛のものとする。

「寛知集 写本二十五冊、縦二十六・七糎、横十八・七糎、袋綴。各冊の表紙見返しに、鹿島清兵衛の蔵書印(印文「子孫永保 雲煙家蔵書記」)が捺してある。」(『東京大学史料編纂所報』第2号(1967年)「愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫出張報告」)

国文学研究資料館 … 『寛文度領知御朱印目録留』に捺された「子孫永保 雲煙家蔵書記」は鹿島清兵衛の印であるとする。

「1960年度に古書店より購入。各冊の表紙見返しに「子孫永保・雲煙家蔵書記・共十七巻」の藍色蔵書印が押印されているが、これは明治・大正期の東京京橋新川の酒問屋鹿島清兵衛の印である。また、17冊のうち2冊に「西莊文庫」の重郭(子持ち)朱印があるが、これは近世後期伊勢の国学者小津久足桂窓の蔵書印である。従って、西莊文庫から流れて鹿島清兵衛の蔵書となったものと思われるが、詳細は不明である。」(史料情報共有化データベース 『寛文度領知御朱印目録留』の伝来の項)

#### 【資料6】

安西雲煙 あんざいうんえん 鑑定家 [生没]文化四年(一八七)生、嘉永五年(一八五二)八月十八日没。四十六歳。墓、東京豊島区本教寺。[名号]名、於菟。字、山君・舟雪。通称、和泉屋虎吉(寅吉)・寅。号、雲煙(雲烟)。[経歴]江戸両国薬研堀に住し、書画の鑑定を業とした。[参考]近代著述目録続編、広益諸家人名録(天保七)、東京掃苔録(『国書人名辞典』岩波書店)

鹿島清兵衛 かしませいべえ 1866 - 1924 明治-大正時代の写真家、能楽師笛方。慶応2年大坂の造り酒屋鹿島屋の次男に生まれ、東京の鹿島屋の養子となる。写真界のパトロンとして知られ、みずからも写真館玄鹿館をいとなんだ。のち鹿島家から除籍され、三木助月の芸名で梅若流笛方としてならした。大正13年8月6日死去。59歳。(『日本人名辞典』講談社)

#### 【資料7】

西尾市岩瀬文庫の『五種遺規』、『司馬温公経進稽古録』ほか11点に捺されている「子孫永保 / 雲煙家 / 蔵書記」の蔵書印主は、すべて「安西雲煙、のち鹿島清兵衛」とされる。

#### 【資料8】

『雲煙家印譜』(西尾市岩瀬文庫 140函-129号)

外題内題なし。書名は仮題(旧目録に従う)。序跋附記等なし。版心下部に「雲煙家所蔵」と刻した四周単辺梓木版墨刷印箋を使用。旧目録に「鹿島家印譜」との注記あり。

内容欄には「雲煙家鹿島清兵衛所用印の原鈐印譜。全67顆。所収印の印文の一部、「和久楽鹿島」「和久楽牛谷雲煙家」「米老女」「鳳雛狂夫」「罔違道以于百姓之誉罔拂百姓以従己之欲」「牛谷書屋儲蔵之記」「雲煙家儲蔵記」「浄江居士」「片石孤雲窺色相清池皓月映禅心」「蕉鹿」「文伝天下口書見古人心」「信而好古」「心幽家居雲煙深处」「深洲 / 和久楽 / 鹿島」「源興孝字文岑号雁嶼」「源智明」「雲煙樵家」「上堂居士」「別号雲煙家」「天生我必有用。」とある。

備考欄には「改装薄茶色表紙。料紙画仙紙。匡郭内寸 19.9/14.4。表丁のみに捺印。前遊紙1丁。鹿島清兵衛家は代々江戸新川の下り酒問屋で幕府御用達の豪商。本書所収印を用いた清兵衛（名興孝、字文岑、号雁嶼・浄江居士・鳳雛狂夫等）については伝不詳。印文のうち「深洲ノ和久楽」は深川和倉町（現・江東区深川2丁目・冬木）のことで、鹿島家の別荘があり、安西雲煙旧蔵の雲煙家文庫もそこにあった。なお明治期の清兵衛（大坂天満鹿島総本家の出身で、清兵衛家の養子となり明治13年襲名、同32年離縁、大正13年8月6日没59歳、写真界のパトロンとして著明）については、長谷川伸「ぼん太夫人」（昭和31年刊『素材素話』所収）に詳しい（延広真治氏の教示による）」とある。

（2011年7月 「日本文学関連電子資料の構成・利用の研究」研究会 於国文学研究資料館）